

馬産地ライター村本浩平の 2018 スタリオンシリーズ競走種牡馬名鑑

Vol. 3 | 7.24[火] ▶ 8.16[木] 開催分



7.26 [木] ストロングリターン賞 【王冠賞[H2]】

2006年産まれで、千歳市・社台ファームの生産馬。父はシンボリクリスエス、母はコートアウト(母の父Smart Strike)。現役時は2~7歳時に日本で21戦9勝。芝の中長距離、もしくはダートで活躍馬を多く送り出してきたシンボリクリスエスですが、ストロングリターンが能力を開花させたのは芝のマイル。しかも、本格化したのは5歳を迎えてからでした。その年の春にオープン入りを果たすと、続く京王杯スプリングCで初重賞制覇。続く安田記念でも2着に入ります。その後も重賞で好走を続けながら迎えた6歳時の安田記念では、G I 2勝馬との叩き合いを制して見事にG I 初制覇。しかも、勝ち時計の1分31秒3はレース記録ともなりました。引退後の2014年シーズンから、日高町のブリーダーズ・スタリオン・ステーションで繋養。初年度産駒のツツミモンはシンザン記念で2着となり、桜花賞出走も果たしています。

7.31 [火] ヘニーヒューズ賞 【ブリーダーズゴールドジュニアカップ[H1]】

2003年産まれの米国産馬。父はHennessy、母はMeadow Flyer(母の父Meadowlake)。現役時は2~3歳時に米国で10戦6勝。うち2着は3回ですべてG I レース。3歳時にはキングスビショップS、ヴォスバーグSとG I 連覇を果たしました。現役引退後の2007年シーズンからは米国で種牡馬入りし、その後はオーストラリアでも繋養されます。産駒のBeholderが米国の牝馬重賞で活躍を続ける中で、日本でも輸入馬のアジアエクスプレス(G I 朝日杯フューチュリティS)、ヘニーハウンド(G III ファルコンS)、持ち込み馬のケイアイレオーネ(Jpn II 兵庫ジュニアGP)が重賞を制覇。2014年シーズンから新冠・優駿スタリオンステーションで繋養を開始されると、日本での産駒デビューを前にモーニンがG I フェブラリーSを優勝。現3歳となった初年度産駒の中からも、昨年のJpn III 北海道2歳優駿を制したドンフォルティスなど活躍馬を輩出しています。

8.14 [火] アイルハヴァナザー賞 【エトワール賞[H3]】

2009年産まれの米国産馬。父はFlower Alley、母はArch's Gal Edith(母の父Arch)。現役時は2~3歳時に米国で7戦5勝。3歳時のロバートBルイスSで初重賞制覇を果たしたアイルハヴァナザーは、続くサンタアニタダービーでG I 初制覇。米クラシック戦線の惑星馬として注目を集めます。クラシック一冠目のG I ケンタッキーダービーでは、1番人気のBodemeisterを交わして優勝。二冠目のG I プリークネスSも、Bodemeisterとのマッチレースを凌ぎきって勝利。34年ぶりの三冠制覇へ期待が高まったベルモントSですが、レース前に屈腱炎を発症して、引退を発表。その衝撃のニュースから時間を置かずに、2013年シーズンから新冠町・ビッグレッドファームでの繋養が発表されました。初年度産駒は4歳を迎えており、函館2歳Sで2着となったウインジェルベラなど、距離や条件を問わないバラエティな活躍を見せています。

8.16 [木] フェノーメノ賞 【フルールカップ[H3]】

2009年産まれで、平取町・追分ファームの生産馬。父はステイゴールド、母はディラローシェ(母の父デインヒル)。現役時は日本で18戦7勝。3歳時、G II 青葉賞を制して臨んだG I 日本ダービーでしたが、ハナ差及ばず2着に敗れます。その年の秋にはG II セントライト記念を勝利すると、果敢に一線級の古馬が待ち受けるG I 天皇賞・秋に挑んでいきますが、ここでも2着に敗れてしまいます。しかし、4歳時緒戦のG II 日経賞を勝って臨んだ天皇賞・春で待望のG I 勝利をあげると、翌年の天皇賞・春でも勝利し、史上3頭目の連覇を果たします。2015年に故障で引退を発表し、翌年から安平町・社台スタリオンステーションでスタッド入り。繋養初年度には146頭の繁殖牝馬を集めており、現1歳となった初年度産駒たちは、父譲りの好馬体も遺伝されています。

「スタリオンシリーズ競走」は、一般社団法人JBC協会(ジャパングリーダーズカップ協会)が産地の支援を得て、優勝馬の馬主や生産者に種牡馬の翌年度種付権利を副賞として贈呈する競走です。 ※生産牧場が海外の場合は付与対象外となります。

